

影

仙台の秋の、気持よい時は、すぐに通り過ぎてしまう。うすら寒くなると、時々、びしよりびしよりとした風情のない雨が降ったりする。雪雲が地平線に湧いて、頬を切るような冷たい風が、音を立てて吹きよせるのも堪らないが、まだそこまで寒くならなくても空は曇り勝ちで、地上では野には枯草ばかり、町には考え込んでいるような冴えない家の屋根が並んで、道には湿っぽいくせに風に舞い上がり易い埃が立っている。そんな頃も余りいいものではない。

私の陋屋は迎えてくれる人もなかった。うすら寒い身を暖めてくれる暖炉があるわけでもなかった。ただ雨露をしのぐだけのあばら屋であったが、気候が陰鬱になって来ると、こんな家でも外から帰って来た身をほっとさせるものがあつた。

夜おそく戸外から帰って来る。暗い裏口からはいって、硝子戸を開ける。そこは、長いこと以前から土足で上がることにきめている板敷の廊下である。廊下と言っても幅は二尺もないほど狭い。そこから障子がある。障子の手かけのすぐ下には、天井からコードが下りて来ている電灯が、しぼりつけてある。これを無理に開けると、コードが千切れてしまう。だから左側の自由のきく方を左へ開ける。その手で右の方を探り、電灯のスイッチをひねる。そうすると、先ず、掛布団を半分に折ってある私の万年床が眼にうつる。私は靴を廊下へ脱いで上がり、外套をきたまま、寢床の、白い、と言いたいが余り白くもない敷布の上に胡坐をかいて、ネクタイを一寸ゆるめて、溜息をつく。

東京の立派な家に住んでいる青年が、外出から戻って来て、部屋の入口で電灯のスイッチのボタンを押してはいる。電気スタンドの光の照らしている絨毯の上の安楽椅子に疲れ

た身を投げ出し、ライターでつけた巻煙草を深くすって吐きだす。烟は、ホツとする気持ちと共に、美しい模様の電灯の笠の下を賑やかな町の雑沓を回想するように渦をまく。そんな場合と比べると、少しばかりまわりの様子が違うかも知れないが、物は考えようだ。例えば東京から直接来ると、仙台の町は馬鹿に淋しい。しかし、青森秋田や、盛岡から来ると、仙台の大きさや賑やかさはまた格別に見えるのである。陋屋も、戸外の美しい時は寝るだけのところとしか思えないが、戸外が寒々として来ると気持ちが違って来る。いくらでも違って来る。

或る年の、秋の末になった頃、そう言うホツとした気持ちを願いながら外から戻って来て家にはいると、何んとなしに部屋の中に異状があるのに気がついた。

何だか判らない。私の部屋の独特の秩序が、何処か少しばかり変わっている感じがする。友人もなく、隣近所の付き合いも一切ない私の家に、他人のはいる筈はなかった。変わっているとは言っても物の無くなっているのではないから、盗人でないことは明らかであった。むしろ、無くなるのは反対に得体の知れない藁屑などが敷布の上に落ちていたり、気のせいとか、妙な暖か味などが布団に残っていたりするのであった。

私はその度に、首をひねった。敷布の上を箒で掃いたり、ひだを直したり、掛布団を畳み直したりして、気が落ち着かなかった。

こんなことが四五日続いた。

或る時、朝の六時の汽車で、田舎へ行かなければならない用が、急に出来た。その前の晩は何時よりも早く寝についた。

明け方であった。

私は、寝ている布団の上から、盤石のような重さで、私の下半身を抑えているものがあるのに気がついた。夢だか現つだか判らないでいたが、私は満身の力をこめて、布団の下から、そのものを蹴上げた。そのものは転げ落ちたらしかった。私は蹴上げながらも半分眠っていたのだろう。そのまま起き上がるうともしないで、もう一度本当に眠ろうとした。

再びそのものが布団の上の上がって来た。今度は、横臥している私の股根を先ず抑えて、尻の上の上がって来た。眠さのために身体力が抜けているので、そのものの重さが非常なものに感じられた。まるで印度のパゴード（仏塔）が私の尻の上に生えたとも言ったような気持であった。

その頃の私の体の健康が具合よかったためか、得体のしれないものに布団の上から抑え付けられていながら、怪奇な恐怖に襲われて体の痺れてしまうようなこともなく、夢寐の間にも現つた信念を失わなかったのは幸であった。

私は再び、力を入れて体をゆり動かし、そのものが足の方にずり落ちたところを、足で思い切り強く蹴上げた。そのものは、音を立てて畳の上に、転げ落ちた。

私は明瞭はつきりと眼がさめた。

部屋の中はもう薄明るかった。枕元の懐中時計さえ読めるくらいだった。見ると、もう目的の汽車の発車まで三十分とない。私は慌てて飛び起きた。寝巻をかなぐり捨て、夢中で枕頭のワイシャツをとって、手を通した。ボタンをはめながらふと見ると、窓のよこの薄暗いところに、一匹の大きな猫が坐っていた。尾の無い黒い猫であった。すねた子供のように壁に真正面に向って坐っていた。

私はそれを見て、こいつだったのかと、大いに腹を立てた。布団を跨いで近寄ると、そ

の背中を蹴飛ばしてやろうとして足を揚げた。私の足先は、風を切るように速くとんだと思つたが、猫は巧みにしかも悠然とかわした。そして、体をのばすと、玄関の障子の破れをついて、玄関へ抜けた。玄関の下は穴だらけで、戸外と風の吹きさらしで通じていた。彼はここから出て行つた。逃げるとともに、侵入の口も明らかにして行つたのであつた。私は腹を立て乍ら、一方ではそれどころでなかつた。寝過ぎした。時間がない。ネクタイをどうむすんだか、外套やマフラーをどうつけたか判らなかつた。私は鞆をつかんで、朝靄の中へ駆け出した。市街電車が来ればそれに乗るに越したことはないが、仙台の呑気な間遠に来る電車を待っているには、まだ汽車の切符も買つてない有様なので、気が気でなく、私は思い切つて、電車通りを走つた。

停車場に来て見ると、もう発車の三分前であつた。喘ぎながら切符を買いもとめている時に、汽車はフォームにはいつて来た。釣銭を受けとるとともに、改札口を走り抜け、遠い階段までひた走り、階段を跳び上がる。跳び下りる。フォームにはベルが鳴っている。客車に飛び込む。駅夫が自分の背中をうんと押す。汽車は発車する。夢中であつた。

空席を見付けて腰をおろすと、思わず大きく息をついた。窓の走る景色を見ながら漸く落着いた時に、第一に感じたのは、喉の猛烈な渇きであつた。口から喉の奥まで、熱をもつて乾いたようにひりひりした。その感じは次に顔に来た。眼の先が黄色くなるような気持ちであつた。それから手足に及んで、体全体が一種特別な疲れに襲われた。この急激な渇きがやや静まると、今度は徐々に、腹が減つて来た。

しかし、湯も飢えも暫く我慢するより他はなかつた。一時間ばかり先へ行かなければ、お茶も弁当も売っていないからであつた。

空は曇っていた。稲の切株ばかり残っている田圃には、此の間まで吊り下げてあった刈った稲もなくなっていた。野は一面に枯草色になって、曇った空の下で白っぽく拡がっていた。ところどころの藁屋根のまわりには、葉の枯れ落ちたポプラが立っていた。そそげた小鬢の白髪のようにであった。枯野の中の一本道を、農夫が裸馬に乗って走っていた。

私は景色を見ながら、この汽車に乗り遅れたらどうだったろうと考えた。行く先では、前の日の電報で、私を出迎える人々が待っているのであった。私の仕事は、その人々を直接相手にするものであっただけに、行くべき時に行かなかったりして気を挫くのは、相手の熱心なのに水をさすようなもので、仕事の一つの挫折となるに相違ないことであった。

不意にすねたように、うしろ向きになって、壁に向って坐っている猫の姿が浮かんで来た。それが、汽車の窓を透し、黒いシルウエットとなって、まるで眼にみえるもののように、枯野の上に映った。彼のお蔭である。少しは猫に感謝しなければならぬかも知れない。しかしこのシルウエットには、そういう感謝のようなものを、たとえ戯れにも向けて見ようとは思えない不快な、何かがあった。私は渴きと空腹の入り混じった不快な気持ちで、この影が汽車の動きとともに野山の上を走って行くのを、じっとみつめていた。